

## センター長の初夢

総合情報処理センター長 須原 正彦

○月×日 朝、研究室に出勤した。いつもの通り、マルチメディア対応の机一体型のコンソールのスイッチをいれる。自分の名前とパスワードを唱えると、声紋を判定し大型ディスプレイ上にメニュー画面が現れる。GUI (Graphical User Interface の略) でできた「予定表」アイコンに指で触れると今週ならびに今日の私のスケジュールが表示される。事務方が入力し私の予定表に転送したものと私自身が入力したものとが色違いになっている。今日の予定表の中の「大学院○○委員会」のところを触れると議題がいくつか見える。そのうちの一つの「議題1」を触れると、それに関する資料が画面上に出てくる。書面付議の議題であった。ディスプレイの片隅に現れているキーボードを触れて回答欄に記入し、「転送」アイコンを押して回答を終える。議題2を押すと「午後3時からのテレビ会議で協議する」とのメッセージがあった。

次に「メール」アイコンに触れると5件のメールが入っていた。

1つ目は、外に向けての公開情報サービスの一つ WWW (World Wide Web という分散型ハイパーテキスト) サーバーの窓を通じて私を知った他大学の学生からのもので、「先生の研究の内容を読ませて頂き大変関心を持ちました。先生の研究分野のエキスパートになりたく博士課程の入試を受験したいので、一度研究室を訪問致したいと思います。御連絡下さい。」とのメールであった。早速「予定表」を開いて来週の空き時間を調べ、返事をワープロでかき、その学生のメールアドレスあてにメールした。私の入力した研究室案内が学外の人に読まれ役に立ったなど、少し鼻高々である。

次のメールは、論文の査読依頼であった。Introduction の部分を読んでいると、少々記述が不正確のようである。確認のためハイパーメディア (自分流に作った、データベースの情報データどうしのリンク) を開き、必要なキーワードを入力すると、いもづる式に関連論文、書籍とその内容が表示される。自分の記憶と表示内容とを照らし合わせると、著者は、やはり最近の研究成果を見落としている。論文を一通り査読したのち、コメントをつけて編集委員会へメールで送り返した。

次のメールは、工作室からだった。先日依頼しておいた試作の装置の部品についての質問であった。「テーパのつけ方が、図面だけからではよく分からない」とあった。ディスプレイ上に「テレビ相談」を開く。うまく相手も受信状態になっていたので、技官の方をよぶとディスプレイに顔が映る。勿論相手のディスプレイにも私が映っている。「おはようございます」と挨拶すると、技官の方も挨拶した。「ホワイトボードをディスプレイ上に開けて下さい。」「はい開けました。」私は図面ファイルをたがいの共通のホワイトボードに移す。相手も同じものが見えている。ディスプレイ上手書きしながら声で説明する。「ここをこのようにしたいんですがね。」「それは無理です。このよ

うに変更したらどうですか。」「その方がすっきりしますね。ではそのようにして下さい。よろしく。」テレビ相談は終わった。手書きイメージ双報通信システムは大変便利なものだなー。

少々疲れた。CD-ROMでBGMでも聴きながら仕事を続けよう。

次のは、他大学の共同研究からのもので、雑誌への投稿の原稿である。充分推敲した後、投稿手続き依頼のお願いを添えて転送した。

国際会議への招待のメールが入っている。今年、米国で開催されるこの会議に研究発表をする予定であったので、Abstractの原稿を書かなくてはならないぞ。

来週、学会があるので、休講と補講の通知を講義棟にある電子掲示板に転送した。

Internetを通じてのメールの仕事が一段落したところでお昼となった。ディスプレイの「テレビ」を触れるとお昼のニュースが映る。「北陸地域情報ネットワーク協議会(FITNET)が自前のマルチメディアネットワークを構築し運用を開始し、北陸地域の学術研究の向上、地域産業の活性化、自治体機能の効率化などが期待される。」との報道をしている。北陸地域の産学官連携により情報通信基盤整備がようやく実を結んだのだ。一安心。生協にアクセスし、本日のメニューを調べると値段まで表示される。今日はビーフシチューにしようかな。

午後からは化学科の情報処理教育の授業があるので、センターへ出かける。最近の学生はファミコン世代なので、少々のコンピュータグラフィックスを用いたシミュレーションでは見向きもしない。昔はUNIXとやらのたいそうややこしいコマンドなどを覚えさせ、ちまちまとメールの転送などを教えると嬉々としてパソコンと格闘していたものだ。今はゲーム感覚で、バーチャルリアリティー(VR)技術を駆使した疑似体験をさせるソフトとハードを用いた教育をしている。昔「ミクロの決死圏」というSF映画があったが、今や分子や原子のミクロの世界に侵入し物質の反応や構造の変化を見せてそのメカニズムを理解させている。医学部では手術の仮想体験をVRで行なっているそうだ。世の中も変わったものだなー。

授業終了後、総合情報処理センターに行く。センター長室で来年度の概算要求の方針を考える。金沢大学では、すでに、図書館など情報関連部局は勿論のこと、全部局に対し超高速のマルチメディア統合情報インテリジェントネットワーク環境が、全学的協力のもとに完璧に整備運用され、研究教育の発展にフルに活用されている。全教官、全事務官各自に、机型ディスプレイつきマルチメディアシステムが配備されている。テレビ、ビデオ、オーディオ、ワープロ、メールシステムなどを統合的に利用できる音声、ビデオ、図形、映像の編集機能があり、電話、G4FAX、テレビ会議、データ転送受信などの機能もすべて一つに統合されたユーザフレンドリーなマルチメディア機器である。これまでのように情報の共有、検索、受信のみではなく発信をすることによりコミュニケーションの世界が著しく拡大し、金沢大学の存在を世界に向けて知らしめている。また各キャンパスの事務管理用のネットワークが統合され、オフィス文書管理システム、スケジュール管理システム、テレビ会議システムなどが完備され、物理的に離れていても共同作業ができ、事務的処理は非常に楽になり、これま

での縦社会の中に横の連携が極めてスムーズとなり、事務の効率化ができ上がった。これもそれも「必ず到来するマルチメディアの時代を先取りすることが、金沢大学の将来の発展のために欠くべからざることである。」という全学的コンセンサスと協力のもとに、他大学をさしおいて概算要求を通していただいたことによるものである。また、このような多岐にわたる超高速のマルチメディア統合情報インテリジェントネットワーク環境の管理と運用を総合情報処理センターの業務としてスムーズに行うために、さらに情報処理の教育と研究が進展するようにと教官、事務官ともに拡大、充実し、財政的支援をして頂いている。このように考えると、これ以上要求することはなにもないのではないか！ えっ？ これ本当かな。いや総合情報処理センターの建物もまだ建っていないはずだが。それなのにこんな立派なネットワークが先にできてしまっているのは少しおかしいぞ。

電話のベルの音が、私をうたた寝から覚まさせた。いや、本当に素敵な夢を見ていた。現実に戻り、夢で見た世界に一步でも近づくように今年も頑張らなくては。

**\*\*\*\*\***

上記の夢の中の機能のうち、現在の設備でもできることがあります。私も利用しています。また、他の大学ですでに運用し始めているシステムもあり、単なる夢物語ではないことを御理解下さい。